

## 三教研総合的な学習部会夏季研修会提案要項 (③)

### 自ら探究し、共に学び合う総合的な学習の授業

～3年生「豆まめ大作戦！ぼくたちの大豆くんの大変身」の実践を通して～

豊川市立御津南部小学校 鈴木 志歩

#### 1 はじめに

本校では毎年3年生で大豆を育てており、大豆は「形を変える」「食べられる」「育てやすい」など子どもたちにとって身近な魅力のある食べ物である。また、周りの大人をはじめ、社会との関わりをもたせやすく、幅広く発展させることができる価値ある教材である。

本学級の子どもたちは、2年生の生活科で「野菜作り」を体験し、自分の野菜に愛着をもって毎日の世話をし、収穫の喜びを味わうことができた。3年生になって理科の学習が始まり、植物の成長について関心をもつようになってきたが、与えられた課題に対しては一生懸命取り組むことができる反面、自分で課題を見つけたり、その課題に対して周りとは協力しながら解決しようとしたりする主体的な姿はあまり見られなかった。

そこで、大豆を育てるという価値ある体験から生まれた目の前の課題について友達同士で話し合い、自分たちで解決していく協同的な学びや体験を何度も繰り返すことで、子どもたちは「もっとこうしたい」「今度はあれをやってみたい」という意欲を高めていこうと考える。その意欲にそって活動の幅を広げていくことで、主体的に学びをつくり、深めていく喜びを感じ、より質の高い探究へとつながることを願い、研究主題を「自ら探究し、共に学び合う総合的な学習の授業」と設定し、実践に取り組むことにした。

#### 2 めざす子ども像

I 価値ある体験を重ねながら、自分たちで学びをつくり出す子

II 他者と協力しながら課題の解決に主体的に取り組むことができる子

#### 3 研究の仮説と手立て

仮説Ⅰ：対象に主体的に関わり、子ども自身が意思決定することができるような場を設ければ、子どもたちは主体的に動き出し自分たちで学びをつくり出していこう。

手立て

- ① 子どもたちの興味・関心や意識の変容を大切にし、体験活動を通して生まれた子どもたちの課題をもとに単元を構想する。
- ② 自分の思いや願い、気づきをワークシートに書く時間を設け、自分の取り組みや考えを見つめ直すことができるようにする。
- ③ 子どもたちの体験活動を価値あるものとしてとらえられるような板書や通信を工夫する。

仮説Ⅱ：一人ではできないことも友達と力を合わせて実現可能になる経験を重ねていけば、自分たちの学びの意味や新たな価値を見出し、自分たちで学びをつくる喜びを感じ、新たな探究や価値ある体験につなげていけるだろう。

手立て

- ① 話し合う時間を設け、思いや気づきを共有したり、他の子どもとの情報交換から自分の考えを深めたりすることにより、本気になれる新しい課題に気づくことができるようにする。
- ② 大豆の収穫までの過程を振り返ることで、自分たちで育ててきたことへの達成感・充実感を味わわせたり、今まで支えてくれた人々への存在に気づかせたりする。
- ③ 身近な人々に向けて提案したり、発信したりする活動を通して、仲間意識やコミュニケーション力を高めるようにする。

#### 4 研究の計画

##### (1) 抽出児について

A児は、活発で授業中はたくさん発言し、自分の思いを伝える場面では積極的であるが、「次はこうしよう」と主体的に動き出そうとする姿はあまり見られない。

本単元では、大豆の成長とともに変化するA児の大豆への思いを大切に、学級全体に広めて共有させることで、自ら新しい課題を発見し、充実した学びをつくり出すことができるようになることを願っている。

B児は、おとなしい性格で控えめであるが、豊かな感性をもち、物事に対してこつこつと一生懸命取り組むことができる。グループ学習や学級全体での活動になると、自分の思いを伝える前に友達の考えを優先してしまうことも多い。

本単元では、グループや学級全体で考えを交流させることで、友達と一緒に学ぶ喜びや大切さを実感させたい。自分の思いや考えに自信をもち、主体的に友達と関わろうとするB児の姿を期待している。

◇手立て・支援

◇野菜を育ててみて良かったことや大獲だったことを聞き、育てることに対して興味をもたせる。  
 ◇本物の大豆を用意し、さわり心地やにおいなどにも注目させる。  
 ◇家で食品を見たり、お家の人に聞いたりして調べさせる。  
 ◇学級通信で授業の振り返りや次に考えさせたいことを載せ、課題への意欲をもたせる。  
 ◇材料に大豆が含まれている食品のラベルを集めて仲間分岐をさせる。  
 ◇意欲を継続させる手立てとして、畑の名前決め、看板作りに取り組みさせる。  
 ◇実際に自分が体験したことを基に調べ学習を進めるようにする。  
 ◇大豆くんの健康観察をすることで、今困っている課題を引き出す。  
 ◇調べ学習で学んだ知識を活かした話し合いができるようにする。  
 ◇「おいしい大豆」をキーワードに農薬について考えさせる。  
 ◇大豆の成長を振り返り、命のつなぐに気づかせるとともに、今までに関わってきた人々やこれから関わっていく人々がいることに気づかせる。  
 ◇自分たちで全部食べてしまうのではなく、今までの感謝の気持ちやもっと知ってもらいたい気持ちについて取り上げ、伝える方法を考えさせる。  
 ◇グループだけでなく、学級全体の課題としてとらえさせる。

2年生の生活科での野菜作りを振り返ろう①

(2) 単元の計画

①単元構想図

(56時間完了)

- ・育てるのは難しかったけれど楽しかったよ。
- ・去年、3年生は大豆を育てていたけど、ぼくたちでも育てられるかな。
- ・大豆を育てて、いろいろな料理にして食べたいね。

ぼくたちも大豆を育てたいな

大豆を育てよう

大豆って、どんな食べ物？

どうやって育てるのかな？調べてみよう②

- ・本で調べてみよう。
- ・大豆先生がいるんだって。聞いてみようよ。

種をまこう①

- ・おいしい大豆に育つといいね。
- ・これからお世話をがんばりたいな。

大豆のお世話をしよう④

- ・茎が伸びてきたから土寄せをしようよ。
- ・もっと育つために肥料をまこうよ。
- ・摘心も必要だよ。

夏の大豆を観察しよう(1)(2)②

- ・小さい花が咲いてきたよ。
- ・実ができてきたよ。うれしいな。

えだ豆ができたよ

えだ豆を収穫して食べよう②

- ・やっぱり自分たちで作った枝豆はおいしいね。
- ・いろいろな人に食べてもらいたいね。

大豆の収穫が楽しみだな

秋の大豆を観察しよう(3)(4)②

- ・虫に葉っぱが食べられているよ。
- ・このままじゃ、大豆が危ない！
- ・葉っぱが黄色くなってきたけど、大丈夫？

大豆をまもろう！大作戦①

- ・黄色い葉っぱは病気じゃないんだね。
- ・虫は退治した方がいいね。
- ・葉をまけば、虫が逃げるんじゃないかな。

農薬を使う？使わない？②

- ・まけば虫はいなくなるかもしれないけれど、大豆がまずくなるかもしれないよ。
- ・もうすぐ収穫だから、まかない方がいいよ。

「おいしい大豆」にするために、農薬はまかない！

大豆を収穫しよう②

- ・毎日、虫を取りにいこう。
- ・ぼくたちで、大豆を守るよ。

収穫した大豆をどう使おうかな？③

自分たちで食べたい

- ・豆腐を作りたいな
- ・きなこなら簡単だよ。
- ・納豆は作れるかな？
- ・どんな味がするのか楽しみだね。

お礼がしたいな

畑を作ってくれた「おやじの会」のお父さんたちにありがとうの気持ちを伝えたいな。

教えてあげたいな

- ・来年大豆を育てる2年生に育て方を教えてあげたいな。
- ・地域の人たちにぼくたちの大豆を知ってもらいたいよ。

大豆もぐもぐ大作戦

大豆にこにこ大作戦

大豆もぐもぐ・にこにこ大作戦 計画・実行⑥

ぼくたちの大豆でたくさんの人たちが喜んでくれたね。いろいろな人たちに大豆を知ってもらえてうれしかったよ。

豆まめ大作戦！  
大成功！！

①畑を耕そう

畑ができたよ

①畑の名前を決めよう

③アンケートをとろう

③畑の看板を作ろう

大豆の種を観察しよう①

- ・本物の大豆を初めて見たよ。
- ・こんなに小さいんだね。

大豆について知っていることを伝え合おう①

- ・味噌や豆腐も大豆でできているよ。
- ・他には何に使われているのかな？

大豆が使われている食べ物には何があるのかな？②

- ・味噌、豆腐、油揚げ、豆乳、おから、納豆、他にもいろいろな料理に使われるね。

「大豆へんしんマップ」を作って発表しよう⑥

- ・「大豆」って書かれている食品ラベルってたくさんあるんだね。
- ・大豆はいろいろなものに変身しているんだね。

大豆についてもっと知りたいな

もっと知りたい！大豆のひみつ

大豆について知りたいことを発表し合おう①

- ・味噌や豆腐の作り方が知りたいな。
- ・外国でも大豆って使われているのかな？
- ・なぜ、節分に大豆が使われるの？
- ・大豆の収穫量が多い県ってどこかな？
- ・大豆にはどんな栄養があるの？
- ・大豆につく虫について調べたいな。

調べ学習を進めよう⑤

調べたことを発表しよう②

ぼくたちが育てた大豆にもひみつのパワーがたくさん詰まっているかもしれないね。

大豆を育ててきた今までの振り返ろう

大豆のいのちと関わってきた人々②

## 5 研究の実際

### (1) ぼくたちの畑ができたよ

#### ① 土づくり

今年度から学校のプールの横に新しく畑が作られた。本校で結成されている「おやじの会」のお父さん方が草取りや環境整備をしてくださって作られた畑である。6月、初めて畑を見に行った。すると、「固くてあまり栄養がなさそうな土だね」と不安そうな子どもたちがいた。そこで、話し合いを行い、2年生の野菜作りの経験から肥料をやるとおいしい野菜が育つことを知っていた子どもたちは、学校の肥料を土に混ぜることに決めた。(手立てⅡ-①)

数日後、早速土づくりを始めた。土づくりから自分たちで行ったことにより、「自分たちの畑だ!」と意識をもたせることができ、主体的な活動のスタートをきることができた。

#### ② 大豆の種をまこう

土づくりをした後、早く大豆の種をまきたい気持ちが高まる子どもたちの姿があった。そこで、一度種のまき方を調べることにしたところ、家の人へのインタビューや本で意欲的に調べることができた。しかし、まき方は分かったものの自分だけでまくにはまだ自信がない様子であった。そこで登場したのが本校で一番大豆に詳しい「大豆先生」である。学校の中で大豆先生を発見し、大豆のまき方や育て方について教えてもらえるよう自分たちでお願いすることができた。これは、大豆のまき方を知りたいという気持ちをもって自ら調べる方法を考えて動き出した行動であり、手立てⅠ-①が有効であったと言える。

数日後、大豆先生の指導の下、種まきが行われた。小さい手で何粒もの大豆の種を大切に持ちながら「大きくおいしく育ちますように」と願いを込めて植えた。

#### ③ 名前アンケート・看板作り

普段子どもたちは畑のことを「大豆の畑」と呼んでいるのだが、「何かもっといい名前呼びたいね」と子どもたちに相談したところ、「他のクラスも2年生も畑を使うから、みんなで決めようよ」ということになった。そこで、3年生全員に畑の名前を募集し、その中から9個の候補を選び出し、2年生と3年生の全クラスにアンケートを実施した。アンケートの呼びかけから実施、集計まで全て子どもたちが行い、その結果、畑の名前は「みと南畑」に決まった。(手立てⅡ-③)

その後、「もっとたくさんの人たちに畑の名前を知ってもらうために、看板を作ろう」というA児の提案により、全員で看板のデザインを決めることになった。みんなの代表として2年生や3年生の他のクラスの思いも取り入れようと何度も話し合いを行い、一つのデザインに決めることができた。(手立てⅡ-①)

そして、全員参加の看板作りが始まった。(資料1)大きな木の板にペンキで絵を描いていく活動は子どもたちにとって大変魅力的だったようで、筆が取り合いになるほどの人気であった。全員が参加できるように塗る場所を分担し、少しずつ時間をかけて取り組んでいった。自分一人ではなく友達と協力しながら1つの看板を作り上げることににより、ますます自分たちの畑や大豆に対する愛着を強めることにつながった。

### (2) 大豆くんの成長 枝豆から大豆へ

#### ① 枝豆って、こんなにおいしいんだ

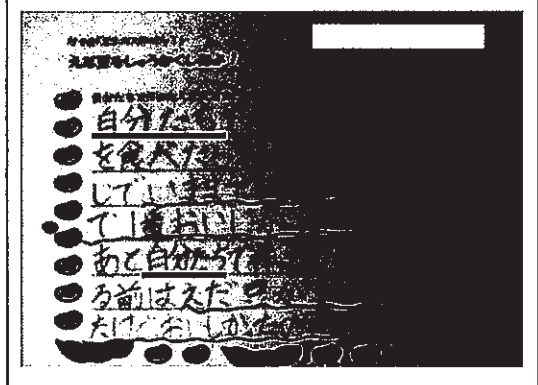
2学期になり、久しぶりに枝豆の様子を見に行ったら子どもたち。お腹の上まで伸びている大豆畑を見るなり、「ジャングルみたい!」「もうすぐ顔が見えなくなっちゃうね」と嬉しそうに話す姿から、夏休みの間に大きく成長した枝豆の茎や葉に喜びを感じていることが伝わってきた。改めて大豆に目を向けさせるために、育った枝豆を収穫して食べることにした。「お店で売っている枝豆よりおいしい!」「今までがんばってお世話をしてきたからおいしいだね」と自分たちで作った枝豆のおいしさに感動していた。さらに、「枝豆がとてもおいしかったから、大豆もおいしく育てたい」と大豆を育てることの意欲へつながったとを感じる。

B児の感想には、「今までに食べた中で一番おいしかった」と書かれている。(資料2)このように感じたのは、「自分たちで作った枝豆」だからこそであろう。ここで「自分」ではなく「自分たち」と書かれているのは、B児が周りの友達と協力しながら世話をしてきたことへの充実感と成就感が読み取れる。B児なりに友達と深く関わり、関わることの良さを実感している証拠であ

資料1 看板作り



資料2 B児の枝豆の感想



ろう。また、「枝豆がきらいだったけど、おいしかったので好きになりました」という言葉から、「自分たちで作った枝豆は特別なんだ」という強い思いが伝わってくる。ワークシートに書かせたことで、枝豆嫌いを克服するほどのおいしさに感動したB児の枝豆に対する強い思いが表れたことは、手立てI-②が有効であったことを示している。

## ② 大ピンチ！虫に食べられちゃう、どうしよう？

### ア 大豆を守ろう大作戦

A児は毎日のように畑に行き、水やりなどの世話をしていたため、虫には早くから気づいており興味をもっていた。観察しているときのA児は、大豆や虫に夢中であった。その分、観察カードに記録する時間がなくなってしまい、観察したことを十分に記録できず、毎回2行程で終わってしまっていた。そこで、A児の虫への気づきを学級全体に広めたいと思い、夏休み中の出校日に学級通信を発行し、虫の発生について知らせた。(手立てI-③)9月、観察に行ってみると、大豆が大きく成長していることの喜びを感じる反面、1学期にはいなかったたくさんの虫に気づき、「ぼくたちの枝豆や大豆、大丈夫かな？」など心配する声があがった。

そこで、「大豆くんの健康観察」をすることにした。普段、子どもたちは朝の会で健康観察を行っており、名前を呼ばれたら「はい！元気です」と自分の健康状態を言うようにしている。そこで、虫への危機感をもたせるために、「みんなの大豆くんは元気なのかな？」と問いかけ、大豆の健康状態に注目して観察することで新たな課題の発見につながるようにした。すると、「葉っぱが食べられているから痛そう」という大豆の気持ちになって観察カードに記録する姿が見られた。

A児は、調べ学習でも、「大豆につく虫」をテーマに調べており、虫についての知識は豊富であるため、頼りにされている様子が伺える。(資料3)そして、この日のA児の観察カードに変化が表れた。A児は大豆が元気でない原因を虫がいるためと考えた。大豆の茎や葉よりも虫が大きく描かれており、大豆についていた虫の名前がたくさん記録されている。特に、「せいちょうをとめるカメムシ」「大豆のくきによく来るマメコガネ」と書かれていることから、A児が自分の知識を活かしていることが読み取れる。(資料4)また、中心に大きく描かれているカメムシはA児が一番気にしていた虫であり、カメムシに対する「やっつけるぞ」という強い思いが表れたのだろう。ワークシートの下顔は、大豆の健康観察をしてみたの自分の気持ちである。A児の顔からは、自分の大豆が虫たちに食べられている悲しさと何とかしなきゃという思いが伝わってくることから、虫への危機感をもたせることができたことと確信した。(手立てI-②)

### イ 農薬を使う？使わない？

大豆の健康観察後、多くの子どもが虫に危機感を持ち、すぐに話し合いを行った。「大豆を守ろう大作戦」である。そこで活躍したのが調べ学習で「大豆につく虫」をテーマに調べていたA児を含む「虫チーム」である。事前に「みと南畑」にいる虫を調査し、インターネットや本などで大豆に与える影響や退治の仕方について調べたことを発表してもらった。他の子どもたちは興味津々な様子で虫チームに質問していた。資料5の下線部のつぶやきから、虫を取るという手段が農薬へと広がり、子どもたちの話し合いの本気度が高まったように感じられた。

後日、「農薬を使う？使わない？」とテーマを絞って話し合いを行った。(次ページ資料6)事前に家で自分の考えを日記帳に書いてきてもらい、じっくりと考えさせた。前回より農薬を使う派が増えたことに驚いたが、使わない派も負けずに反論した。下線部のA児の発言は、「とにかく

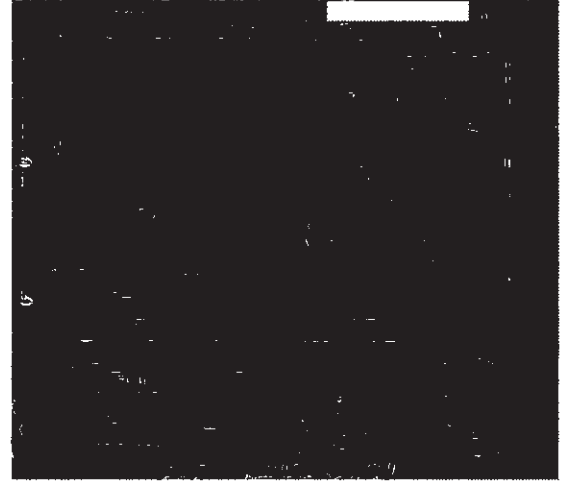
### 資料3 授業記録【大豆の観察時】

- A児：丸まっている葉の中に卵や幼虫がいるんだよ！丸まっている葉はない？  
C1：変な虫がついてる。玉みみたいな茶色いカメムシの小さいやつ。おーい！Aくん！この虫って何？  
A児：それはマメコガネだよ。  
C2：Aくん、(枝豆が)落ちとったよ。  
A児：アリが(茎を)切ってるのかもね。  
(A児はその後も友達と虫を探し続ける)  
C3：(黒くて大きなイモムシを持ってきて)何これ？  
A児：これはモンフォルチョウの幼虫だよ。葉だけ食べるんだ。ヒマワリのときもおったよ。

#### 【教師メモ】

A児はみんなに質問され、得意げに答える姿が見られた。下線部は、理科で既習したヒマワリを育てた知識を活かしていることが分かる。この日のA児も虫を探しては取ることに夢中になっていた。

### 資料4 A児の観察カード②



### 資料5 授業記録【虫を退治する方法】

- C1：カメムシみたいな虫がいたけど、どうしよう。  
C2：虫が葉っぱをむしゃむしゃ食べているのを見たよ。  
(虫チームの発表を聞き、虫たちが大豆の葉を食べてしまうことを聞き、さらに心配になる子どもたち)  
C3：虫を手でとればいいよ。  
C4：でも、また上ってくるよ。  
C3：じゃあ、遠くに捨てる？  
C1：ちょこちょこ放課に行けばいいんじゃないかな。  
C5：虫を殺しちゃうとかかわいそうな気がするけど・・・。  
C3：大豆を守るためには仕方ないよ。  
C2：でも、自分たちだけで取るのは、大変じゃない？できるかな？  
C6：じゃあ、農薬を使えばいいんじゃない？前も使ってもらったよね？

虫をとらなきゃ」と思っている周りの子どもたちを驚かせた。A児は平行している話し合いを聞いて、「農薬を使わずに虫から大豆を守る方法」を自分なりに考えたのであろう。もうすぐ収穫ということもあり、「おいしい大豆」にするために自分たちで虫を取りに行くという子が多くいたので、ひとまず農薬は使わないことに決まった。(資料7) 農薬を使う派の子どもたちは、「みんなの大豆」であることと、「おいしい大豆」にしたいという思いは同じであったので納得した様子だった。

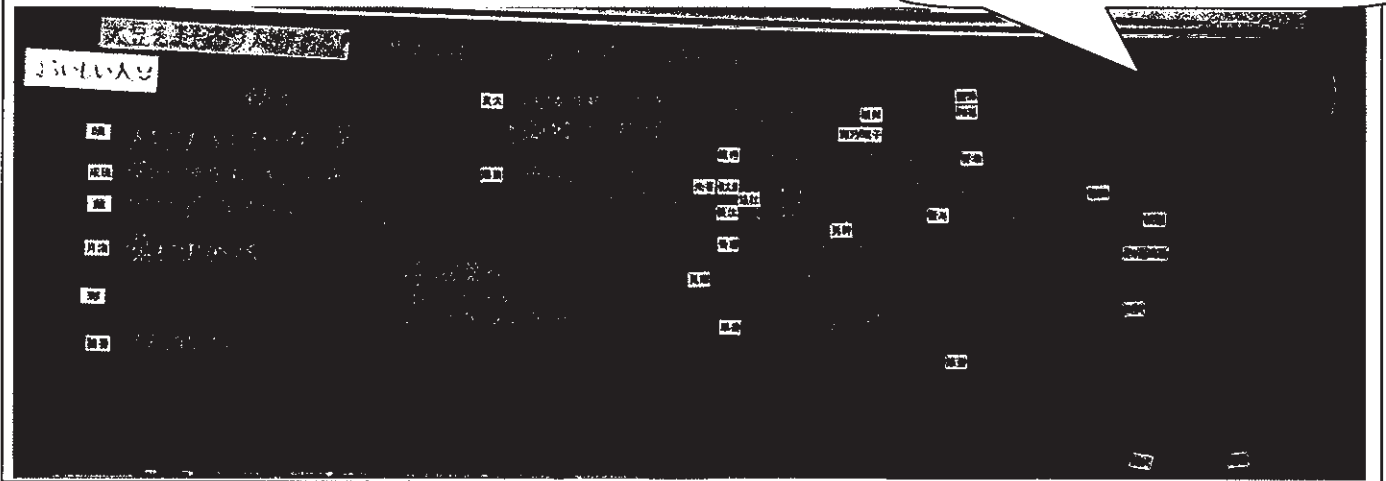
資料6 授業記録【農薬についての話し合い】

(農薬を使うべきか、使わないべきか話し合っている途中で、「どれだけ早く楽に虫を退治できるか」という方向にずれたため切り替えした。)

- T : おいしい大豆にするための一番よい方法は何だろう？  
 A児 : 農薬を使うと大豆がだめになるよ。  
 C1 : おいしい大豆じゃなくて、まずい大豆になっちゃうよ。  
 C2 : 自分たちが食べたときに体によくはないんじゃないかな。  
 (大豆の味に焦点が当たるようになってきたが、結局話し合いが平行してしまう。)  
 A児 : 葉っぱは食べられてもいいんだよ。大豆に全部栄養が  
 いっているから。  
 C3 : え！？葉っぱは食べられてもいいの？  
 C4 : じゃあ、虫は取らなくていいの？  
 A児 : 葉っぱはいいけど、大豆についている虫は取った方がいいよ。

資料7 板書【農薬を使う？使わない？】(手立てI-③)

話の流れを変えたA児の発言



農薬を使わないということで、「放課の様子を見に行きたい」「虫をがんばって取るからね」など一人一人が自分にできることを考え、次の日から行動に移す姿が見られた。A児は話し合い後の感想に「大豆くん、すぐに虫をとるからまっていてね」と書いている。A児が書いた「まっていてね」という言葉からは、大豆への優しい気持ちと「僕が守ってあげるからね」という強さが込められている。大豆に話しかけるような言葉で書くことができた姿は大豆への愛情が深まったと同時に、自分の感情を素直に表せるようになってきたことが読み取れる。言葉通り、朝や放課に畑に行き、虫を取ったり、大豆の様子を観察したりする積極的な姿が見られた。(手立てII-①)

③ 枯れてきちゃったけど・・・大丈夫なの？

11月初め。9月頃と比べ、大豆の大きな変化に子どもたちが気づいた。あんなに青々としていた大豆の茎や葉が黄色くなり、さやも茶色く変化してきたのである。この「枯れてきた」という気づきを学級全体で広めたいと思い、早速学級で「大豆が枯れてきちゃったけど大丈夫？」というテーマで話し合いを行った。その結果、心配している子に対して「葉が黄色くなっても大丈夫」「大豆になりかけているんだよ」「このままにしておけば大豆になるよ」と教える子が出てきて、子どもたちは安心した様子だった。自分たちの気づきを学級で共有し、情報を交換し合って解決した瞬間であった。(手立てII-①)

心配していた虫も子どもたちの努力の成果か、だんだん少なくなり、食べられてしまうことなく無事収穫の日を迎えることができた。大豆先生に収穫の仕方を教えてもらいながら嬉しそうに収穫する子どもたちの姿があった。

(3) 大豆の一年を振り返ろう

① 大豆くんもぼくたちもがんばったね 命のつながり

収穫して十分満足した子どもたちは、「早く食べたい！」という気持ちが高まっていた。「自分たちががんばって育てた大豆はどんな味なんだろう」「豆腐やきなこを作ってみたいな」など普段の会話にも大豆の話題が登場する程であった。大豆を何に使うか考える前に一度自分たちの取り組みを見つめ直すため、大豆を育ててきた今までを振り返ることにした。

収穫から一つ一つの出来事をさかのぼり、ワークシートに記入させ、当時の思いや活動を振り返らせた。(次ページ資料8) そのときの子どもたちは「土寄せは大変だったけど、がんばったよね」「枝豆はすごくおいしかったよね」と昨日のここのようにはっきりと覚えており、意欲的に発言していた。土づくりをはじめ、肥料や摘心、虫取りなど大豆のためにみんなで頑張ってきたことを実感し、「ぼくたちってすごいんだ」という自信をもたせることができた。(手立てII-②)

収穫から種までさかのぼったとき、「大豆の種ってこんなに小さかったんだね」と改めて大豆のパワーに気づいた様子だった。(資料9)下線部のA児の発言に対して、初めは周りの反応が薄かったが、A児の意見に付け足して発言する子が増えるにつれて、だんだんと「なるほど、そういうことか」とつぶやく子も増え、「命のつながり」に気づくことができた。

② いろいろな人たちが  
応援してくれたんだね

自分たちの頑張りや命のつながりに気づくことができた子どもたちに、さらに自分たちと関わってきた人々について気づかせたかった。(資料10)下線部は、誰よりもたくさん畑に大豆の様子を見に行き、一生懸命世話をしてきたA児だからこそこの気づきである。交通指導員さんとの一回一回の会話は少ないかもしれないが、それが積み重なることによってA児の心に残ったということを示している。また、「通りかかった地域の人や、何を育てているの?と話しかけてくれたのが嬉しかったよ」という声もあがり、関わってきた人々への気づきを広めることができた。今まで「自分たち」だけしか考えになかった子どもたちが周りの人々との関わりに気づき、感謝の気持ちをもった瞬間であった。

授業後のB児の感想には、自分たちを支えてくれた周りの人々への感謝の気持ちと大豆の命を大切にしたい気持ちが表れている。(資料11)下線部の言葉からは大豆が一番に思うB児らしさが伝わってくる。周りの人々との関わりや命のつながりに気づいたことで、新たな課題が見つかることができた。(手立てⅡ-②)

(4) ぼくたちの大切な大豆をどう使う?

① 世界に一つだけのぼくたちの大切な大豆

たくさん大豆を収穫して満足そうな子どもたち。大豆はさやのまましばらく乾かした後、さやから大豆を取り出す作業を行った。事前に大豆先生から聞いていた方法は、大豆のさやを足で踏み、はじけさせる方法である。この方法を子どもたちに言えばきくと驚くだろうが、面白そうにやるだろうと予想していた。しかし、実際は大豆を踏んで取り出そうとした子どもは32人中たった4人。他の子たちは地道に手作業で大豆を取り出していった。A児も初めは踏んでいたが踏むのをやめ、友達と協力して手で作業を進めていた。大変な作業だったが、どの子も嬉しそうな表情をしており、A児は大豆を見て「真珠みたい!」と嬉しそうにつぶやいた。

大豆を足で踏むのをためらう子どもたちの姿から、毎日水やりをし、台風や虫など様々な困難を乗り越え、やっと収穫できた大豆は特別であり、一人一人に大豆に対する大切な思いをもたせることができた実感するとともに、子どもたちの中でたった一粒のただの大豆が「世界に一つだけのぼくたちの大切な大豆」へと変わったことを確信した。

② 大豆もぐもぐ大作戦

特別な思いが込められた大豆を子どもたちはどう使うのだろうか楽しみであった。子どもたちに「大豆がたくさん収穫できたけれど、どうやって使おう?」と問いかけ、大きく膨らんでいた思いを一度ワークシートに書かせることにした。(手立てⅠ-②)読んでみると、様々な考えがある中で、全員のワークシートに書かれていたのは、やはり「自分たちで料理して食べたい」という考えだった。そこで、「第1回大豆もぐもぐ大作戦」として、自分たちでどうやって食べるか

資料8 B児のワークシート【今までを振り返ろう】



資料9 授業記録【命のつながり】

- C1: 大豆の種って、こんなに小さかったんだね。
- C2: 小さな種からこんなに大きくなったなんて、すごいね。
- A児: ぼくたちが収穫した大豆と種って同じじゃない?(うなずく子もいれば、理解していない子もいる。)
- C3: どういうこと?
- A児: 畑で落ちた大豆から芽が出ていたのを見たよ。だから、収穫した大豆をもう一回植えれば、また生えてくるんじゃないかなあ。
- C4: ぼくも家で大豆を植えたら芽が出たよ。

資料10 授業記録【関わってきた人々】

- T: 大豆って、みんなだけの力で育てられたのかな?
- C1: 大豆先生が種まきとか収穫とか手伝ってくれたよ。
- C2: いろいろ教えてくれたよね。
- C3: 畑の名前を決めるときに2年生がアンケートに答えてくれたよね。  
(「おやじの会」のお父さんたちが畑を作ってくれたことを話す。)
- C4: ぼくのお父さんに聞いたら、畑の草取りとかを頑張ったって言ってたよ。
- C5: えー! 知らなかった。「おやじの会」のお父さんたちってすごいね。
- C6: 「おやじの会」のお父さんたちに、畑を作って良かったなって思ってもらいたいね。
- T: 他に関わってくれた人はいるかな?
- A児: 交通指導員さん!
- C7: 何で?
- A児: だって、畑に行くときに会うと「大豆は大きくなった?」とか声をかけてくれたから。

資料11 B児の振り返り

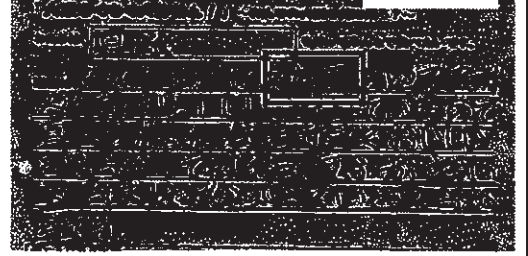


という話し合いを行った。

初めに子どもたちから出た意見は、豆腐、きなこ、納豆、豆ご飯、きなこクッキー、味噌、醤油の7つだった。どの意見からも感じられるのは、「自分たちが一生懸命育てた大豆で作れば、絶対においしい」という思いである。豆腐は、今までの調べ学習で作り方を知っているためか、自信をもって「作りたい」と発言する子が多くいた。中には、味噌は作るのに1年程かかることを知っていた子が発言したところ、「なるほど。じゃあ、食べる頃には4年生になっちゃうから無理かな」とつぶやく子もおり、ただ作りたいという考えだけではなくて時間や手間を考慮して可能かどうか判断することができていた。(手立てⅡ-①)

この話し合いでB児は「豆腐を作りたい」と発言している。(資料12)自分が食べたいからというよりも「豆腐が嫌いな子はほとんどいないと思うから」と理由に挙げており、自分よりも友達のことを気遣うB児らしい思いが感じられる。B児が発言した後にも、B児に続いて考えを発表する子も出てきて、周りの子たちにも影響を与えた発言となった。もう一つ注目したいのが、再び「枝豆のおいしさ」について書かれていることである。B児にとって枝豆が考えの中心にあり、改めて枝豆のおいしさを思い出し、大豆の味を想像しているのであろう。また、今回は「自分がおいしかった」のではなく、「みんながおいしいと言っていた」という記述であることから、枝豆のおいしさを自分だけでなく友達と共有できていたことが読み取れる。(手立てⅠ-②)

資料12 B児の考え



「第2回大豆もぐもぐ大作戦」では、豆腐作りに賛成の子どもたちを中心に「300gで2丁作れるから、全員分だと2400gくらいになるね。余裕で足りると思うよ」など、どの子も具体的な方法を話すようになり、現実的な話し合いとなった。話し合いの中で「〇〇さんの意見を聞いて、豆腐に考えが変わりました」と言う子が出てきた姿は、友達の考えと自分の考えを比べながら聞き、真剣に話し合いに参加しようとしている証拠である。最終的に「豆腐ときなこクッキーを両方作っても大豆は足りると思うよ」という発言で、豆腐ときなこクッキーを作ることに決定した。(手立てⅡ-①)豆腐ときなこクッキーで使う大豆を含め、自分たちで使いたい分の大豆を分け、確保することができた。(資料13)

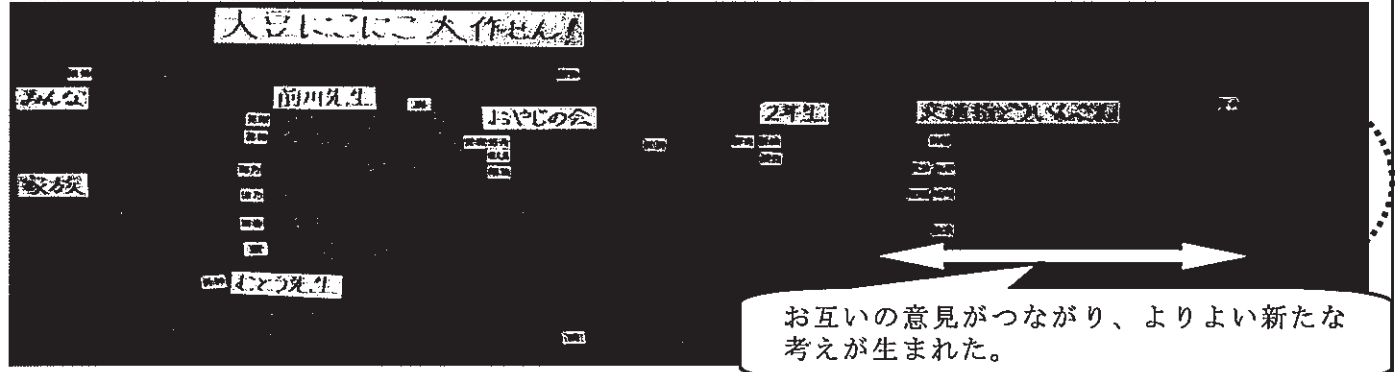
資料13 大豆の使い道【自分たちで食べる分】



### ③ 大豆にこにこ大作戦

自分たちが食べる分の大豆は確保した子どもたちが次に考えるべき課題は、残りの大豆をどう使うかである。残った大豆をみんなが笑顔になるような使い方をしようという思いを込めて「大豆にこにこ大作戦」とし、「第1回にこにこ大作戦」での話し合いから、「お世話になっている先生たち」「おやじの会のお父さんたち」「2年生」「交通指導員さん」のために使いたいという意見が出てきた。それぞれの相手に対するお礼の思いが強く、しっかりと自分の思いをみんなの前で発表する姿が見られた。(資料14)

資料14 板書【第1回大豆にこにこ大作戦】(手立てⅠ-③)

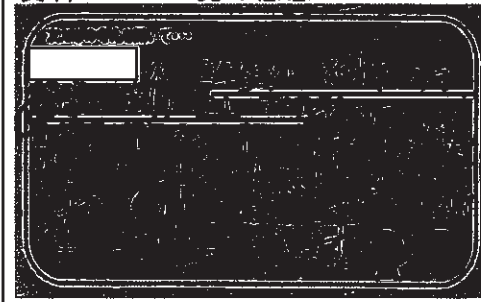


この話し合いでのB児は、以前大豆の一年間を振り返ったときの感想に書かれていた「自分たちで全部使っちゃったら命が切れちゃう」という思いから、「大豆を少し残して、大豆の命を次につなげたい」と発言した。今まで「誰かにあげる、使う」ということばかり考えていた子どもたちにとってB児の考えは新鮮であった。その後のグループで話し合いを行った。B児のグループでは、「大豆の命をつなげる」と「2年生に大豆をあげる」という意見がつながり、「2年生に自

分たちの大豆を育ててもらおう」という新たな意見が生まれた。話し合いの後、B児はグループの中で出た新しい意見をみんなの前で発表した。その日の話し合いの後の子どもたちの感想には、B児の「命をつなげたい」という考えに影響された子が多く、B児の名前や「命をつなげる」というキーワードがたくさん出てきたことから、B児の思いがみんなに認められたことが分かる。

B児の感想より、下線部に注目したい。(資料15)「～と  
言ってくれた」という記述からは、友達に自分の考えが認め  
てもらえたことへのB児の喜びが読み取れる。ここには同じ  
グループの子の名前も書かれており、自分の考えとつなげること  
ができた自信が感じられる。また、今まで「命をつなげる」とい  
う考えだったのだが、「2年生にあげたい」に変わっている。こ  
れは、友達と考えを組み合わせた結果から生まれた新たな考えが  
よりよいと思った証拠であり、自分なりに考えを深め、発展さ  
せることができた姿である。B児にとって、自分の考えが友達  
に認められた経験は大きな自信となっただろう。(手立てⅡ-①)

資料15 B児の感想



(5) 大豆もぐもぐ大作戦・大豆にこにこ大作戦、大成功  
その後、子どもたちはそれぞれの「もぐもぐ・にこにこ大作  
戦」を成功させようと話し合いを繰り返し、実行していった。  
「もぐもぐ大作戦」では、きなこクッキーや豆腐作りを体験し、  
「にこにこ大作戦」では、お世話になっている身の回りの人々  
にお礼の気持ちを込めて大豆や手紙をプレゼントした。(資料1  
6) また、自分たちの大豆の命をつなげるため、大豆の育て方  
を書いた「大豆ブック」と一緒に、残った大豆を2年生に渡す  
ことができた。自分たちが育てた大豆によって、相手も自分  
たちもにこにこ笑顔になれたことで、どの子も「1年間、大豆を一生懸命育ててきてよかったな」  
という思いをもち、達成感を味わうことができた。(手立てⅡ-③)

資料16 豆腐作りに挑戦



## 6 研究の成果と課題

### (1) 研究の成果

#### ○仮説Ⅰについて

大豆を育てるという価値ある体験を通して、今、自分たちの目の前にある課題を見出し、既習の知識や友達との情報交換、今までの経験を生かしながら解決していこうという前向きな姿を多くの場面で見ることができた。A児は「また来年、3年3組のみんなで大豆を育てたい」と、にこにこ大作戦の振り返りに書いていた。A児にとって、大豆を育ててきた体験は充実したものであり、「もう一度やりたい」と思えるような貴重な時間であったことが読み取れる。自分の思いや願いを書いて見つめ直したり、通信などで友達と考えを共有したりする場を設けたりすることは、新たな課題への意欲につながり、自ら学びをつくり出すことができる子を育てるために有効であったと言える。

#### ○仮説Ⅱについて

大豆と真剣に向き合うことで、大豆を育ててきた背景にある自分たちの頑張りや支えてくれた周りの人々の思いに気づくことができた。B児をはじめ、友達と力を合わせることで自分の思いを実現させる喜びを感じ、自信をもって取り組むことができるようになった子どもたちの姿があった。本気になって友達と解決策を話し合う活動を繰り返し行ったことは、友達の考えを認め、自分の考えに自信をもつことにつながり、自分たちの学びに喜びや大切さを感じられる子を育てるために有効であったと言える。

### (2) 今後の課題

全体で話し合いを行う前に4人グループで考えを伝え合う活動を取り入れた。一人一人の思いを出すためには有効であったが、グループの中には弱い子が強い子の考えに流されてしまう場面も見られたので、子ども同士の考えをつなげたり生かしたりするための教師の出を工夫していく必要がある。一人ひとりの思いや願いを知るために教師から子どもたちへの関わりを多く持つように心がけてきたが、子どもたちが自ら思いを発信するまで待つことも大切だと感じた。子どもたちがより主体的に動き出すために、子ども対子どもの関わりがもてるような学習場面を大切にしていきたい。

## 7 おわりに

この単元の初めの頃の子どもたちは、「大豆」という名前は聞いたことあるが本物を見たことがない子どもも多く、形や色、大きさなども知らない状態でのスタートであった。そんな受け身だった子どもたちが大豆を育てていく体験を通して、目の前にある課題に対してお互いの思いを汲みながら本気で話し合い、自分たちの思いを友達と共に実現させていこうと学びを深めていくことができた。本研究で行った成果と課題を今後活動に生かし、よりよい学びを子どもたちに提供できるように支援していきたい。